

半年振りに帰宅を許されました。

周東と首都東京との間を行き来した一週間でしたが、やはり、さまざまな落差のあることを感じました。

新幹線の車窓から次々と目に入ってくるメガロ・ポリスの光景は、悪性コロナの問題に汚染されている国土を忘れ去るほど、豊かな恵まれた国であると目を細めて眺めていました。

周東町で新たな朝を迎えました。「みどりもふかき、若葉のさと」「めぐみににおい、愛にかおる」(讚美歌122番1節)、讚美が口をついてでてきます。

先週、沖縄の牧師から久しぶりに電話がありました。沖縄における開拓は6年でしたが、その間、教派を超えて親しく交わった5人の牧師がおりました。今となっては、忘れがたいゴルフ仲間です。生活保護を受けている者がゴルフをたしなんでいるのが沖縄なのです。驚いたり、あきれたりしました。格安のゴルフ場がアチコチにあります。それまで、ゴルフとは無縁のわたしでしたが、これも沖縄におけるお付き合いと覚悟を決めて、ゴルフセットを買い求めて、練習を始めたものの、身が入らず、ロスト・ボールの繰り返しでした。

ところが、そのゴルフ仲間の近況を伺い驚きました。一人は膠原病で寝たきり、もう一人は杖なしでは歩けない状態であるとお聞きして驚きました。愛妻を失ったものが二人もいます。嗚呼、年年歳歳人同じからず。

「ご覧ください。与えられたこの生涯は僅か、手の幅ほどのもの。御前には、この人生も無に等しいのです。ああ、人は確かに立っているようでもすべて空しいもの」(詩編39篇6節)。

人の一生とは、神の一瞬の瞬きよりも短いものと知れば、大事なことは、この限られた人生の中で、いつ永遠なるお方と出会う機会があるかであろうと思われます。

